４　福祉施策

平成 22 年 11 月 5 日（金）
パリ市社会活動センター　（社会援助活動）

パリ市社会活動センターにおいてパリ市の高齢者への食事援助、介護援助、見守り対策などの具体的な支援活動を伺った。

支援活動のなかでも特に先駆的と思われるのは、自立して生活できない単身高齢者に対して遠隔リモート監視システムを活用して行っている見守り対策である。このシステムにより単身高齢者に何か起こった場合には直接連絡を取るなど適切な対応ができるようになっている。

社会活動センター玄関前

また、元気な高齢者に対しては、老人の孤立や孤独感を防ぐためになるべく外出させようとさまざまなレジャーの企画や場の提供をしており、このことに非常に力を注いでいた。

フランスの高齢化率はまだ 16.4％と日本より低いが、高齢者単身世帯率は 38.6％と高い。フランスでは子どもたちは大学生になると親から独立して暮らすことが一般的であり、それが高齢者単身世帯の多い理由と思われる。

現在、フランスのリタイア平均年齢は 61.5 歳、平均寿命は女性 85 歳、男性 80 歳といわれている。このまま高齢化が進めば労働人口のバランスは大きく崩れ、2020 年には 700 億ユーロの財源不足になるといわれている。

（質疑応答）

Ｑ：　具体的にパリ市の高齢者に対する援助はどのようなものがあるのか。また、社会活動センターの支援活動に関して伺いたい。

Ａ：　パリ市では高齢者対策として３種類の援助がある。

① ミディマム給付金（国が定めているミディマム給付金に上乗せをしてパリ市独自の援助金を出している。）。

② 最低年金生活者へのパリ市近郊における国鉄等無料パスの発行。

③ 65 歳以上の自立できない高齢者、あるいはハンディキャップを背負っている障害者（年齢にかかわらず）に対しての食事援助、介護援助。

パリ市では高齢者対策と障害者対策がほぼ一緒である。

高齢者サービス担当次長補佐フレデリック・ラヴュルトゥー＝トルラ氏からの説明を受ける

Ｑ：　パリ市独自の援助金を設定している理由はなぜか。

Ａ：　国が定めている最低の援助金は月 650 ユーロ～700 ユーロだが、パリ市の物価が高いため 100 ユーロ程を上乗せして援助金を出している。

パリ市では年金の全くない生活困窮者が非常に多く、受給者は２万人であり、65 歳以上の人口の５％を占めている。

Ｑ：　社会活動センターの主な活動はどのようなものか。

Ａ：　社会活動センターは主に先ほどの３つの援助の③の支援活動を受け持つ。

高齢者の生活介助と食事の支援等を主な援助活動としている。

センターが把握するパリ市の寝たきりの老人は約 2,300 名である。

一人暮らしの高齢者に対しては、さまざまなレジャーの提供を通じて老人の孤立や孤独感を防ぐための対策活動に力を入れている。そのほか、老人大学や老人クラブ活動、老人宅の食事サービスの充実を図っている。

また、自立して生活できない単身高齢者は遠隔リモート監視システムにより見守りの対策を取っており、全く動けない高齢者は重度老人ホームへ入所することになっている。これは無料である。

社会活動センターのパリ活動センターでは職員 2,700 人が高齢者支援に働き、内 2,000 人は老人ホームで働いている。

Ｑ：　老人大学に関して具体的に伺う。

Ａ：　市民大学では高齢者の生活向上を図ることを目的としていろいろな大学に参加してもらえるようメニューを提供している。

登録制で登録をすれば誰でも授業料が無料で大学講座を受けられる。

現在、４万人程の高齢者が登録をしている。

フレデリック・ラヴュルトゥー＝トルラ氏と共に

平成 22 年 11 月 5 日（金）
パリソリデール　　（フランスのボランテイア団体）

パリソリデールは、2003 年夏にパリが異常気象により 40 度を超える酷暑が続いて一人暮らしの高齢者が大勢死亡し、その中でも引き取り手のない高齢者が多かったことがきっかけとなり、当時のスペインの銀行が慈善事業として一人暮らしの高齢者と住居を持てない若者の同居マッチングを行っていたシステムを基にフランスの法律の下で行えるシステムに変え、2004 年にフランスで最初にスタートさせた NPO 団体である。マッチングの仕組みや課題、取り組みの現状についてマダム・メッセアンさんにお話を伺った。

マダム･メッセアンさんとパリソリデール入口で

室内で説明を受ける

（質疑応答）

Ｑ：　まずパリソリデールに関して伺う。

Ａ：　パリでは９月になると大学の新入学を迎え、若者達が親元から独立して一人暮らしを始める。資金のない若者と、持ち家はあるが一人暮らしの孤独な高齢者のそれぞれのメリットを生かしたマッチング（同居の仲介）をスタートさせたのがパリソリデールである。これは、高齢者に対しては誰かが同居してくれることによる孤独の解消や日常生活の安心を確保し、若者に対しては住居確保の社会的支援ができることになる。具体的には高齢者が若者に自宅の一部屋を低家賃若しくは無料で提供し、若者にはお年寄りの安心確保と心の支えになってもらうマッチング（同居の仲介）を行ってい

るのである。

Ｑ：　対象の基準は具体的にあるか

Ａ：　若者側は、学生、職のない若者、若い労働者を対象とし、18 歳未満の未成年者は対象外とする。

　また、30 歳以上の者はあまり好ましくないとしている。その理由としては、問題発生時において既に独立している成人（わが子）に対しては親であっても責任が持てないことをパリソリデールとしても責任が持てないからだ。また、住居確保が目的となることも考えられ、その場合においてもフランスの法律では冬の寒い期間(11 月 1 日から 3 月 15 日まで)に借家人を退去させることができないため、トラブルになりやすい。

　高齢者側は、最低基準として、あまりにもひどい持病や住宅が著しく汚い等の場合はマッチングの申し込みを受け付けないとしている。

　パリソリデールとしては同居人をうまくマッチングさせることが一番重要なことと考えている。

Ｑ：　マッチングの種類はどんなものがあるか。

Ａ：　マッチングには２種類ある。

○　家賃有料（料金は安い）　比較的若い老人

　フランスではほとんどの場合、成人すると子どもたちは親と同居しないため、大学入学時や下宿を探す若者にとっても安い家賃はメリットがあり、大きすぎる家に住む高齢者にとっては空き部屋が埋まるメリットがある。

○　家賃無料　高齢者(現在最高齢 109 歳の方がいる)

　この場合は同居人がいることにより高齢者の安心につながる。同居のルールは特にないが、冷蔵庫などのスペースは分けているようである。

どちらの場合も家事の手伝いや介護はしない！させない！

マッチング期間の平均は、最低が大学在学中の１～２年であり、長い人は４年くらいである。

Ｑ：　申し込み費用はどのくらいか。

Ａ：　高齢者は会員登録制であり、費用は30ユーロの書類作成費用のみである。
若者はインターネット経由で申し込む（費用15ユーロ）。
その審査は大変厳しく行われている。具体的には、７ページにわたる質問に答え、マッチング希望の動機も詳細に書かねばならない。なぜなら、ただ住いだけを探すわけではないので動機を何よりも重視しているからである。
（参考　＊2010年11月末の１ユーロ約108円）

Ｑ：　年会費はあるか。

Ａ：　申し込み費用の他に年会費が必要である。

家賃が有料の場合は	高齢者	年間	150ユーロ
	若　者	年間	200ユーロ（家賃は別）
家賃が無料の場合は	高齢者	年間	210ユーロ
	若　者	年間	350ユーロ（家賃無し）

Ｑ：　マッチングはどのようにするのか。

Ａ：　マッチングはたいていの場合は１回であり、書類による申し込み後に若者の面接を行い、条件が合えば高齢者宅へ出向いてそこでマッチングする。

Ｑ：　マッチングは年間どのくらい成立するか。

Ａ：　年間約800件のマッチングが成功している。
また、一般の申し込みのほかに役所からの紹介も受け入れている。

Ｑ：　マッチング同居後のフォローはどのようにしているのか。また、何か問題は発生しないか。

Ａ：　若者は、マッチング後は１ヵ月に一度のレポートを提出する義務がある。出来ない場合は契約解除となり、かなり厳しい義務である。
若者は、申し込みの時点で「高齢者と同居」という同居老人のいつ起こるか分からない「死」に対して最初から意識を持つことになり、マッチングが単なる宿探しではなく、高齢者対策の一翼を担うことは間違いないと実感するのである。
センターではフォローとして定期的に電話で様子を伺う。このフォロー

によって、特に今まで事件や問題は発生していない。

登録者リストボード

Q：　同業者はどのくらいあるか。国内のネットワークはあるか。

A：　フランス国内 20 の地域にあるフレンドリーの団体が COSI（コジ）というネットワークを組んでいる。パリソリデールが中心である。

Q：　活動する上で補助金は受けているか。

A：　政府からの補助金は特に受けていない。

社会基金の中の斬新なアイデアの活動アソシエーション等のいくつかの単発補助は受けている。

※写真の日付設定が日本時間のため、全て 2010 年 11 月 6 日を表示。

平成 22 年 11 月 10 日（水）
アムステルダム市役所

アムステルダム市の福祉の総責任者を務めるペギー･ブルク議員にお話を伺った。

オランダは生涯にわたり高負担・高福祉の国である。

特殊健康保険は生涯にわたり全国民が収入の 12.15%を税負担するのである。そのことにより、高齢者施設の入所や医療のほとんどが無料であり、誰もが老後の安心を実感している。

アムステルダム市役所にてペギー・ブルク議員と

アムステルダム市の高齢化率は14.2%、25 才以上が 42.0%と国としては若く、高齢化はまだ日本のように深刻ではないという。したがって、高齢者施設の不足も深刻ではないが、全てが無料のため将来の財源不足への危機感は強い。

市が行っている支援としては、高齢者に対してはボランティア等民間の活力を生かしたメニューを充実させる一方、介護をしている人々に対しての支援にも力を注いでいた。介護者支援について介護者支援法の下、さまざまな取組の充実を図っていたことには驚かされた。これら支援の取組は、高齢者が自宅にこもることなく社会参加し、寝たきりや引きこもり、施設入所を減らすことが目的であるという。

（質疑応答）

Ｑ：　介護者支援法による介護者支援の取り組みにはどのようなものがあるか。

Ａ：　出来るだけ長く（持続的）な介護ができるような支援を行っている。

- 介護者の休育サービス（介護者を休ませるためにサービスを代行）
  介護人が休みたいときにはショートステイができるようにする。
- 介護者の休業支援（介護をする目的で会社を休むことがないよう支援）

・　就労支援（介護専念によって社会とのつながりを切らないよう支援）
・　介護支援(自治体が月３万円の介護支援をしている)。など

Ｑ：　特に若者に対しての支援の充実は。
Ａ：　休業支援など安心して介護に時間を費いやせるような環境支援が充実している。

Ｑ：　在宅支援で力を入れている事は。
Ａ：　風呂場の改修工事、エレベーターの設置、自力で家庭内の台所に立てるような支援など自宅のバリアフリーを市がパッケージで支援している。

Ｑ：　民間の活力はどのようなものがあるか。
Ａ：　マントル・ソルグ（mantelzorg：mantel は包み込むの意味を持ち、傘下介護・コートのような介護）が高齢者の社会的な活動を支援している。
　また、市がマントル・ソルグをするボランティアの人々のネットワークを支援している。

Ｑ：　マントル・ソルグの支援内容は。
Ａ：　子供や隣人がケアをしており、高齢者が自宅にこもらず、なるべく外出してくれるよう知恵を絞っている。
・　財団の施設で経営しているレストランなどで 65 歳以上の人は通常より格安料金で食事ができる。
・　年間 20 ユーロで交通機関が使える。
・　週に何時間か清掃に人を派遣する。など

Ｑ：　一人暮らしの高齢者に対してはどのような支援を行っているのか。
Ａ：　単独高齢者の場合は(食事の世話・食事の宅配サービス、介護、等)チームで世話をする。(自立して食事が作れない人の宅配は個人負担有り)
　デイサービスは全て無料である。
　アラームシステム(見守り)は月 10～12 ユーロで誰でも申し込むことがで

きる。(マントル・ソルグが支援)

オランダでは高齢者施設に入所する場合には負担金が年間 3,500 ユーロかかるが全て国の支援である。

医療も、特殊健康保険により国民の長い治療、高い治療は国が責任を持ったが、今、財源の不足が心配されている。

＊ 参考

オランダの主な福祉関係の税率について

福祉関係の税は、AWBZ（一般特別介護保険法)、AOW（一般老齢年金法）及び ANW（一般遺族補償法）がある。 (2009 年)

	年総収入（ユーロ）	所得税率（%）		
			AWBZ、AOW、ANW	
			64 歳未満※	65 歳以上※
1	18,218 未満	33.45	31.15	13.25
2	18,218－32,737	41.95		
3	32,738－54,366	42.00	—	—
4	54,367 以上	52.00	—	—

＜出典：ジェトロ HP＞

アムステルダム市のシンボルマーク

～水害・火災・病害の３つのペケ！！！～

平成 22 年 11 月 11 日（木）
フラウデホフ　（スヌ―ズレン高齢者施設）

高齢者入居施設のフラウデホフにてスヌ―ズレンの取り組み状況、効果等を伺った。

スヌーズレンは、30 年ほど前にオランダでスタートし、試行錯誤を繰り返し約 10 年かかって広まったそうである。今ではオランダのほとんどすべての施設が取り入れており、世界的な広がりをみせている。

デンマークを初めとする全世界の人々からマルチ・センサー・エンビローメントとして広まり、日本の施設からも研修に来ているそうである。

スヌーズレンは、免許制ではなく訓練である。24 時間ケアが出来る資格を持っていれば研修を受講できる。日本でいえばケア・マネージャー資格を有することが条件となろう。

２日間のコースで研修料金は 250 ユーロから 300 ユーロである。

スヌーズレン・コーチアドバイザーのイルセ・アクターベルグさん
（右から３人目）と入所者の個室内で

スヌーズレンの語源は、「オランダ語の『スヌッフレン（クンクン匂いを嗅ぐ）』と『ドゥーズレン（うとうとする）』という二つの日常的な単語からできた造語」である。「『ドゥーズレン』はスヌーズレンの持つ安らぎの部分」を表し、「『スヌッフレン』はより行動的な部分」を指している。また、スヌーズレンは、「も

ともと重度の知的障害を持つ方々との関わりの理念として、1970 年代半ばにオランダにある知的障害を持つ方々の施設で生まれ発展」し、「知的障害を持つ方の施設の一つであるハルデンベルグ・センターがその発展の中心的な役割を果たして」きた。「重い障害を持つ方々が受け入れやすい刺激や環境を提供し、そこでは障害を持つ方自身が、自分の選択で、自分自身の時間を持つ。援助者は同じ人間として刺激を楽しみ、お互いの感じ方や喜びを共有する」としている。

スヌーズレンの浴室

スヌーズレンは、次のことを基本に取り組んでいる。

◎ 「障害を持つ方が感じ取りやすく、親しみやすいように、光り、音や音楽、いろいろな素材の触れるもの、香りなどの刺激を揃えた環境を作り、提供する。（物理的環境の整備）」

◎ 「障害を持つ方との活動で、障害を持つ方自身の活動のペース、人や物への対応の仕方をありのままに受け入れ、障害を持たない人も共にその場を楽しむ。（人的環境の整備）」

◎ 「人と人が出会い、互いの感じ方や喜びを共有し、関係を深める。（関係性の深まり）」

＜出典：日本スヌーズレン協会「知的障害を持つ人自身の活動～スヌーズレン～」＞

視察した施設には約 200 名の入居者がおり、そのうち 140 名が障害者（リハビリ）、62 名が認知症（重度２～３患者）であり、認知症患者は現在 62 名が８名単位でグループを組み入所している。

最高で８名の入居者に１名のスタッフが担当として付くため入居者に安全・安心に対応できるとのことであった。

オランダの高齢化は 65 才以上が 15.40％であり、高齢者の施設に入所待ちは約６ヶ月とのことである。

障害者は 24 時間支援を要する重症児のみ、ナーシングホームが受け入れる。

オランダでは 1960 年代から高齢者専用住宅をスタートさせている。もちろん無料である。

グループホーム管理室

共同の居間でくつろぐ皆さんと

回廊中庭

中庭

（質疑応答）

Ｑ：　スヌーズレンの特徴の一つは。

Ａ：　スヌーズレンは介護者の負担を軽減することである。

Ｑ：　スヌーズレンで大事なことは何か。

Ａ：　患者の今までの歴史を知ることが大切である。

生まれてから現在までの一人ひとりの歴史を知ることである。

Ｑ：　スヌ―ズレンの講習はどこで受けることができるか。
Ａ：　オランダではボランティアコーチによる講習会を受ける。

Ｑ：　オランダにスヌ―ズレンの協会はあるか。
Ａ：　オランダにはスヌ―ズレン協会のようなものはない。

Ｑ：　スヌ―ズレンはセラピーの一種か。
Ａ：　スヌ―ズレンとはケアに含まれる種類のもので、セラピーとは異なる。

Ｑ：　この施設で使用している代表的なスヌ―ズレン用具はどのようなものがあるか。
Ａ：　スヌ―ズレンの用具の一つとして、目にカメラが埋め込まれた日本製のアシカ型ロボットを使用している。

　価格は１つ約 60 万円で、この施設で一番人気がある。

　このロボットが一度故障した時に日本へ送り、修理するための入院をさせた。

スヌーズレンの用具についての説明

院内の廊下で

　院内の廊下椅子でこのロボットを抱き、実に穏やかな認知症の老女に出会った。